
月明かりの下

大和貴行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月明かりの下

【Nコード】

N0821C

【作者名】

大和貴行

【あらすじ】

普通の世界で生きることを諦めた遠野和久。彼は殺し屋として人生を始める。一度も外に出たことのない一条悠は、普通の生き方に恋焦がれる。そんな二人の出会いが歯車を狂わせていく。自身の境涯を恨む二人が奏でる物語は何処に辿り着くのか。

第一話：出会い（前書き）

初めての投稿になります。連載という形は取りたくなかったのですが、早く投稿してみたいとの気持ちで勝ちました。いつ続きが出来るかは予想もできません。駄作ですが、よろしく暖かい眼差しで読んでやって下さい。

第一話：出会い

病室の窓から望む景色はいつもと変わらない。そこは青々とした精気に満ちている。それを隔てるのは一枚の硝子。

どんなに強く叩いても割れることはなく、鍵すらないそれは空けることも不可能だ。

空気は澱み、空調は音もなく動きつづける。

ブラインドが音を僅かに立てながら下がっていく。

全ては自動。そこに人はなくただのヒトガタをしたガラクタだけが存在していた。

病院のホールは閑散としており、その玄関前で男は呟く。

「まったくもってつまらない。」

少し苛立ちながら、全くの無感情で呟かれたそれは、呪縛として男自身を苦しめる。

無造作に取り出した煙草に火をつける。肺に紫煙が充たされる。

煙を吐きながら見つめるのは十三階の一室。太陽が反射して中の様子は分らない。

「つまらないな。」

そうまた呟いてから煙草を揉み消す。

男を迎えるのは自動ドア。ゆっくりと開かれたそれは男を誘う。

異界はいとも簡単に、人の力を使わずに交じり合う。

ドアをぬけ正面のエレベーターに向かう。文字盤には十一階から十五階は記載されていない。

男は十階のボタンを押すと、ゆっくり目を瞑る。エレベーターの中に設置された鏡が男を映し出していた。

一瞬の無重力感のあとエレベーターのドアが開く。

男はゆっくりと目を開き、同じようにゆっくりと歩きだす。その動きはひどく緩慢のようで、隙が一切ないようにも感じる。

静まりきった廊下を男は靴音を響かせながら進む。メトロローム

よりも正確なリズム。まるで世界は男の靴音とともに秒針を動かしているのかと錯覚させる。

暫くすると世界が止まる。男の前には上へと伸びる階段。

「つまらないな」

男はまたそう呟いた。

途中踊り場に出て九十度に折れ曲がる階段を三階分登る。それでも男は息を乱さない。静寂な空気を男の呼吸は乱さない。それは元からないものとして消去された存在。

革靴と大理石が織りなすシンフォニーだけが形ある音として存在していた。

ドアをノックする音がシンフォニーに終わりを告げる。

今から始まるのは大円舞曲。おそらくは、男の唸りと女の喘ぎが交錯する素晴らしいワルツ。

返事はなく男はため息をつく。

「つまらないな」

ドアノブに手をかける。鍵がかかっている様子はない。重くも軽くもないドアは音もなく簡単に開いた。

辺りは一面の闇。白の壁紙に白の絨毯。

家具は白のベッドがあるだけだ。ブラインドから微かに漏れる光がかろつじてそれらが白だと知らせる。

太陽の光はすでに朱色。数十分も経てば、闇がこの世界を包むであらう。

男はゆっくりベッドへと近づく。先ほどまでの足音は絨毯のせいで全くしない。ここになって初めて男の呼吸音が聞こえ始める。

ベッドの上には一人の女。黒く長い髪は扇状に広がる。つまられた切れ長の目は意思の強さを連想させる。

それに連なる長い睫が小刻みに震えている。人の気配を感じ脳が覚醒しかけているのだらう。それを手伝ってやるように男は軽く頬を叩く。瞼がゆっくりと開かれる。

「あなた誰」

それが彼女が発した今日初めての言葉だった。

「私が誰であろうと君には関係ないことだ。私には意味がなく、その目的にこそ意味がある。」 彼女は少しも理解出来ない言葉に躊躇いながら答える。

「確かにあなたが誰であろうと私には関係ないわ。

でも、ここは私の部屋で、あなたは勝手に入ってきた侵入者。それだけで何者かを答える義務があると思いますが、如何？」

男は神妙に頷き、新しく言葉を繋ぐ。

「確かに道理だな。私の名前は遠野和久。来訪の理由は君を殺してきた。言うことは以上だ。何か質問は？」

「色々と質問したいことはあるけど。とりあえず私は一条悠。よろしくね、人殺しさん。まず一つ目の質問。どうして私を殺すの？」

女は薄く微笑みながら首を傾げる。

長い髪が流れる。彼女の視線が男の瞳を射ぬく。

「人から頼まれた。クライアントの情報はいくらこれから死ぬ者でも答えられないがね。あとは私の趣味だ。」

「あまりいい趣味をお持ちじゃないようね。二つ目の質問。どうしてこの部屋に入れたの？」

「それも守秘義務の範疇だ。悪く思うな。」

普通にここまでたどり着くなら多くの関門を潜らなければならない。全自動のシステムは関係者以外を悉く排除する。少なくとも、カードキーと暗証番号、指紋と声紋が登録されていない限り侵入は不可能なはずだ。すなわち不法侵入は不可能。そうすると彼は正規の殺し屋。

「じゃあ三つ目の質問。あなたのカリスマは私のお父様ね。」

確信に満ちた瞳。そこに戸惑いはなく、悲しみも窺いしれない。死を直前にした時の人間とは思えない。男は思わず唾を飲む。

「生憎それには答えることが出来ない。

ただ君はガラクタだ。社会に必要とされていない。私は意味の無いものを嫌う。だから君が憎い。

君はこれからもずっとここにいてつもりか？それこそが真理に対する冒瀆。もう一度言おう。君はガラクタだと。」

「ガラクタには存在意義がない？」

「その通り。大人しく死んでくれれば楽で助かるのだが。」

男は胸ポケットに手を伸ばす。

そのスーツの下にはおそらく拳銃が隠されているのだろう。彼女は目をつむる。自分の最期に興味がないかのように。

カシユと音を鳴らし、暗くなりかけた室内をオイルライターが一瞬の火を点す。煙草の匂いがゆっくりと部屋中に侵食していく。煙はゆらゆらと。匂いゆるゆると舞っていく。

男が取り出したのは拳銃ではなくシガレットケースとライター。

「あなたは常識が無いようですね。健康増進法をご存知ですか？それともここが病室ということをお忘れですか？」

男は僅かに唇を歪める。

「ここは病室？間違ってもらつては困る。ここは廃棄場だ。つまりは君が言った通り君の部屋ということになる。よって此処は公共施設などではなく法も無意味だ。」

深く息を吐く。白乳色の紫煙が息をなぞり、やがて漂う。

男は半分も吸っていない煙草を床に捨てる。白い絨毯はゆっくりと一点を中心に黒い円を作っていく。黒の侵食を止めたのは男の革靴。慌てて消すこともなく足を上に置き、軽く体重をかける。ただそれだけで火は消える。

「最後の質問。なぜ私を起こしたの？」

彼女は絨毯の焦げにも、部屋に充満した煙草の匂いにも無感情でただ呟く。

「寝たままだとつまらないだろ。大いに抵抗してくれて結構。いい声で啼いてくれ。」

「心底いいご趣味をお持ちじゃないようね。」

部屋に共鳴するは二つの笑い声。それが途絶えると同時に衝撃音。音は小さく、振動は大きい。窓が大きく揺れる。その震源地は男と

女。

男の手には拳銃ではなくサバイバルナイフ。

女との距離は二歩で十分お釣りが来る。

正に必殺の間合い。

しかしながら男は心臓も喉も狙わない。

身体の急所は狙わない。彼が殺した死体には致命傷はない。全ての殺人は出血多量による。故にめがけるは彼女の肩口。振るうのではなく、突く。ナイフを振るうはそれが動けなくなるあと。悲鳴を奏でさせるときのみ。大きく一歩踏み込み突き出すだけで、それとの勝負は決まる。全身を筋肉へと変え、肩を大きくうがつ。

二人は衝突にたじろぐことなく元の位地から動いていない。

男は自身の肩を押さえ僅かに顔をしかめる。

女は何もなかったようにベッドから起きる。その表情に感情はなく、端正な顔立ちを変えることなく男を見つめる。おそらくは何があっても彼女は表情を変えないだろう。どんなに痛く、もがき、苦しむことがあっても。彼女に死を迎えるまでは。

その端正な容姿はまるで人形。精神を宿さないただのヒトガタ。どのような言葉で着飾ってもココロがなければだのガラクタだ。

「つまらないわね。次は？」

抑揚のない彼女の言葉は男を震えさすには十分の威厳がある。

男は自分の肩に気を遣る。

自身がイメージした通りに全てがいったはず。しかし肩から血を流すのは自分だ。

痛みからして打撃ではない。

鋭利な何かで刺された痛み。

腕を伝った朱色の液体は白銀の絨毯を彩る。右肩はすでに死に体。血のせいで滑る右手からナイフを左に持ち変える。

刃に汚れはなく自身の身体を映し出す。柄は血の朱。刃は白銀。そのナイフはさながらこの部屋の模造のように彩られていく。

この絨毯が朱に染まる時、刃は彼女の血で朱に染まるだろうか。

焦りと苛立ちが男をさえなみ始めていた。

「化け物が。」

苛立しげに述べる言葉。しかしながら彼女は何も動じない。意味のない言葉。

「先ほどはガラクタと仰っていたようですが？」

「どちらにしても、私の嫌いなものに違いはないがね。」

女はベッドから出て、カーディガンを羽織るところだ。足元のスリッパはこの場にそぐわない。

スーツ姿の男とパジャマ姿の女。男はナイフを握り、女は何をするでもなく男を見つめる。

間合いは先ほどと変わらない。男にとっては最高の距離。武器を持たない彼女は死を待つのみ。

先ほどまでの遊びとは違う。狙うは心臓。一発でかたをつける。

彼女が何をしようとも変わらない必殺をイメージする。全身に緊張感が走る。息を止め、大きく踏み出す。

「死ぬわよ。」

彼女の声がその瞬間聞こえた。

先ほどのような衝撃音は聞こえない。男はその声と同時に大きく後ろに飛んだからだ。彼女と闇雲に戦うのは危険だ。そう本能が警笛を鳴らす。

「どうしたのかしら？」

女は尋ねる。

「私も命は惜しい。」

「殺し屋でも？」

「ああ。他人の命はどうでもいいが、自分のものとなると話は別だ。」

「見逃してもいいわよ。」

彼女の甘い言葉が鼓膜を振るわせ、脳を惑わす。

「それでも、死ぬのは私だ。任務不履行はそのまま死を意味する。」

「そう。じゃあ私があなたを助けてあげる。私の言うことを聞いて

くれるのなら。」

「条件による。」

男は忌々しげに答える。

「簡単なことよ。私をここから出して。」

「それは簡単なことだが、君はいつまで私を守ってくれる？ クライアントは間違いなく私を殺す。」

「とりあえずは一ヶ月。ほとぼりが冷めるまでかしら。」

「良い条件だ。だが一つ忘れていることがある。私は君が嫌いだ。」
「あなたらしくもない発言ですね。もっと利己的な人間だと思っていました。少しだけ時間をあげます。私の話に付き合っていただけですか？」

「その時間は生きられるの？ なら聞く以外に選択肢はないな。」

「私はイメージを現実にします。鏡としてね。あなたは私の右肩を刺そうとした。だからあなたは右肩を刺された。良かったですね。殺そうとしないで。一種の催眠術です。催眠状態の人間はただの木でも、熱された鉄だと信じれば触れたところにみみず腫を起こすそうです。それと同じことです。だから人は私を殺せない。」

人は常にイメージをしてから行動に移す。意識していなくても脳が勝手に身体にイメージを伝えているのですから。無の境涯たりえる者はこの世にいない。いるとしたらそれは人ではなくただの死人です。だからあなたは私を殺せない。あなたは人間だからです。

「それでも私の提案を飲めませんか？」

「自分の手の内を明かしてもいいのか？」

「構いません。私の有利には違いありませんから。」

優しく話しかける彼女は表情を笑みに変える。

「逃げるだけなら一人だけでも出来る。」

わざわざ君を連れて行くことはない。話を聞いていたら君は後手の攻撃しか出来ない。攻撃されない限りは攻撃出来ないの？」

女は笑顔のまま答える。

「イメージを現実にすると言いました。私のイメージをそのまま現

実に起こすことが出来るとは考えないのですか？」

男は女をじっと見つめる。彼女の真意はどこにあるのか。右手をスーツの中に差し入れる。肩の痛みだけに僅かに顔を歪める。取り出したのは煙草だ。火をつけゆっくりと煙を肺に入れる。痛みと紫煙により頭の中は鮮明さを確実に磨きあげる。

「提案を飲もう。後に付いて来い。」

「ご理解戴けて幸いですわ。」

女はそれ以後何も言わずに男の後を追う。

男は言った。

「君はこれからもずっとここにいろつもりか。それこそが真理に対する冒涇。」

彼女はここから逃れる。自身の鳥籠から。何も与えない、危害も善も与えないコンクリートで出来た牢獄から。

建物から出てくる人影は二つ。殺し屋とガラクタ。二人はこれから外の世界で生きる。今まで経験したことがないことが二人を襲うだろう。それを乗り越え初めてガラクタは人に、殺し屋は人になるのだろう。

月は中天に登る。月光は二人の影を薄く映し出す。

二人の物語は始まったばかりだ。

第二話：始まり（前書き）

前話までのあらすじ

遙を殺しにきた和久。彼の全身に走るのは、鋭利な痛みと悪寒。生きるために選んだ道は、彼女を匿うこと。

なぜ私は彼女を匿ったのだろう。おそらくは恐怖。恐怖？死ぬことを恐れたことはない。なら痛みによって判断力が鈍ったのか。よく分からない。とりあえずは成り行きに身を任すしかないのだろうか？

第二話：始まり

繁華街の雑居ビル。その地下一階。コンクリートがそのまま露骨に出ている部屋は、湿度が高く、換気扇を一日中回したところでも住みよい環境は得られないだろう。

和久は鏡の前に立つ。脱いだスーツは床に無造作に放られていた。右肩の傷は深い。止血はしていたが、その傷が癒えるわけではない。本来なら医者に通い、縫わなければならぬ傷だろう。

しかし、和久に通う医者はいない。クライアントを裏切ったのだ。いくら闇医者といえども、自身の存在を極力避けるべきだ。

ゆつくりと、机に歩く。机の上にはいくらかの薬が置かれている。消毒と包帯を巻くぐらいはしておかないと腕を失いかねない。きつく包帯を巻いていく。血は何とか流れ傷は完璧にふさげるように。

痛みが全身を駆け抜ける。痛み慣れているとはいえ、痛くなくなるかといえばそんなことはない。歯を食いしばり呻き声を抑える。

「静かにしてもらえませんか？」

「黙つてろ。」

「あなたもね。」

痛みで存在すらあやふやになりそうな遙を和久はにらむ。右肩の傷は遥につけられたものだ。彼女といえるだけでも気が狂いそうになる。どうして俺がこんな奴と生きなければならない。

「それは、あなたが生を選んだからです。」

和久の心を掌握するかのように彼女は答える。

「黙ってると言った。」

「そうですか。」

彼女はそれっきり何も話そうとはしなかった。

和久は机の引き出しに手をかける。引き出しの中には、拳銃が二丁。小型拳銃と大型拳銃が一丁ずつ。弾薬は…百発といったところか。

床に広げられているスーツまで歩く。ポケットから取り出したのは煙草。今日と明日を考えようとして啜えた煙草に火を点ける。

一人を一発で仕留めるのは不可能だ。おそらくは十人単位での攻撃だろう。牽制を含めて使う弾丸は一人当たり良く考えても五発。

「二十人か。」

和久の気持ちは重い。とてもではないが、この状態で無事に明日を乗り越えることができるとは考えられなかった。

殺風景な部屋の中、換気扇だけが音を立て回る。部屋にあるのは、ベッドとソファ。あとは机があるくらいだ。無機質な部屋とだけいうと、遥の部屋も同じだが、色にたとえるとあそこは白銀。ここは灰色。錆びた銅色だ。

重い空気と煙草の煙が部屋を包む。

病院を出たのは夜の八時。車を飛ばして駐車場に着いたのが夜の九時。そこから徒歩で五分ほどの距離に和久の家があった。繁華街の中にある家にたどり着くには、多くの視線をくぐらなければならない。奇異な視線が二人に注がれる。

和久の後ろを歩く女はパジャマ姿。和久はスーツの右肩が血で朱く染まっている。それだけでも人目を引く。しかしながら、一番の原因は二人の容貌にある。

シャープな顔立ちに、透き通るような肌。凛々しく清廉な眼差しの中に鋭く光る瞳。一文字に結ばれた口元は小さく、女のそれを連想させる。小さな整った顔は女性ならずも男も目を遣る。それが遠野和久。

後ろに歩く一条遥は、闇さえも吸い込むほどの漆黒の長い髪。ネオンに照らされる髪は、色という次元を越え、人々を惑わす魔となる。

細く整った眉に、切れ長の目。睫は長く、瞬きと共に、微かに震える。すらっと高く通った鼻は、整形をしたとしても手に入らないであろう天物。小さな口元はルージユを引いたように赤く、可愛らしい。

薄い生地のパジャマ越しに見え隠れする、なだらかなライン。細身の身体に胸はなく、ふくよかな臀部も存在しない。

しかしながら、今にも崩れそうな儚さと決然と存在する凜々しさが融合され確固たる美を創造する。

行き交う人々は二人を見つめても、警察に通報をしようとは考えない。繁華街のけたたましさは、何もかもを吸収する。誰もが厄介ごとに足を突っ込むことを嫌い、血やパジャマ姿などここでは日常のことでしかない。

遥と和久を刺す視線はすべては興味半分の視線。または劣情感を満たす視線でしかない。

二人は様々な視線を無視しながら歩き続ける。

しかし、二人は気づかない。多くの視線の中にある、監視という視線に。

重い空気と沈黙を破ったのは遥だった。

「これからどうするつもりかしら。」

さしたる不安も不満もなく呟かれた言葉は和久の思考を妨げる。

「いま考えているところだ。お前はとうしたい？」

彼女は部屋を見渡していた瞳を、和久に向けなおす。

「とりあえずは、二人称を変えてほしいわ。」

「二人称？」

「そう、二人称。さつきから君やお前でしか私を呼ばないわ。自己紹介はもう済ましたでしょ？」

これから一ヶ月間付き合う間柄なのに、そんな呼ばれ方じゃ気が滅入ってくるわ。

それとも、あなたが二人称を使うときは私にだけ使ってくれるつもりなのかしら。それならそれで、文句はないけど。だって夫婦みたいじゃない？」

何が楽しいのか、満面の笑みを差し出す。凜々しい顔が一瞬にして向日葵のような笑顔を作り出す。

それに対して出てくるのは、和久の苦笑い。その笑顔は誰もが笑顔で返さざるを得ない。

「初めて笑いましたね。」

彼女の言葉に、和久はしばらく笑顔を作ったことがなかったことに気付く。

「わかった。君の要望を飲もう。遥。」

君と遥が混ざった言葉に、和久はまた苦笑いを浮かべる。それにつられて遥も笑う。

沈黙から笑い声。談笑はまだ終わりそうにはない。

「右肩を見せてください。」

遙は、意味のない会話を打ち切り和久に近づく。

「止血はした。傷は縫っていないが、閉じることは閉じるだろう。」

「いいから見せてください。」

有無を言わせぬ態度に、和久は縛ったばかりの包帯を解く。朱い傷口が蛍光灯のもと照らし出される。

「痛そうですね。」

「お前が。いや遙がやったんだろ。俺には何の落ち度もない。」

「私を殺そうとしたくせに。」

遙の目が細まる。和久を睨む。

「確かに。この傷に対して何も文句はない。これでいいだろ？包帯を貸せ。」

「あつた早々で命令ですか？」

遙はやれやれといった態度で少し首を振る。それを黙殺しながら、和久は包帯を取る。

「それじゃあ明日乗り越えられないのではないですか？もっと利口になってください。それとももう忘れましたか？私は和久を助けると約束したんですよ。」

「敵が来た時だけでいい。」

ぶっきらぼうな言葉を吐く和久を見て、ため息をつく遥。

「黙って、傷が治るイメージをしてください。」

「はああ？」

「早く。」

遥の意図を掴めない和久は言われるままにイメージする。

「もっと強く。イメージよりもさらに上。願望、呪詛、何でもいいですからもっと強く想像してください。」

和久はイメージをする。二時間ほど前までは自由に動いた右腕を、それが強く握るナイフを。そしてそれで殺そうとした女の姿を。

気がつけば和久はナイフを握っていた。遥を見る。

苦痛に歪む顔。揺れる瞳。

「いきます。」

振動が起きる。カタカタと音を立てながら換気扇が止まる。直下型地震のような振動が二人を襲う。

「どうですか？動かしてみてください。」

遙の声で、意識が舞い戻る。

和久は自身の右肩を見る。そこにあつた傷はなく、痛みもない。ためしにゆっくり大きく肩を回す。痛みはない。違和感もなく、今すぐにでも殺人の依頼を受けられるほどに、以前の右肩に戻っていた。

「お前」

何をしたと言いかけて、彼女を見て言葉が終わる。

「遙です。」

「っ。そんなことはいい。どうした？具合が悪いのか？」

彼女は右肩を押さえ、冷や汗を流す。

「和久のせいです。」

唇を微かに動かし、掠れた声を出す遙。少し休みますと言って布団に包まる。規則正しく上下する胸をみて心配するほどでもない。と判断した和久は、ソファーにもたれる。自由に動くようになった右腕で、煙草を一本取り出す。換気扇が動かなくなった部屋に、紫煙が漂う。

思えば、誰かと共に過ごす夜は一年ぶりだった。

思えば、誰かの名前を口にするのは初めてだった。

思えば、誰かに傷を治してもらったのは初めてだった。

思えば…

疲れから睡魔が襲う。寝づらいソファも今は極上のベッドだ。力を抜き、全てをソファに預ける。柔らかくもないソファは、和久を押し返すように拒んでいた。

繁華街に朝が迎える。人通りは皆無で、カラスが大手を振って飛び交う。

地下に、陽は入らず、代わりに昨日から点けっぱなしの蛍光灯が二人を照らし出している。故にここには朝がなく、昼もなく、夜もない。

存在するのは、男と女。人が時間を支配する。

硬いソファで寝たせいで身体が痛い。床にはフィルターまでが完全に灰になった煙草。どうやら消さずに寝てしまったらしい。和久は、眠たさと気だるさが残る頭を振る。その瞬間に目に入るのは、ベッドで眠る一人の女。遙だ。

朝の制服を済まし顔を洗う。朝食は普段はとらないが、遙が食べるかもしれない。コンビニは繁華街の入り口まで行かないとない。

和久は舌打ちをしながらも、上着に袖を通す。その肩口が濡れていることに気づき、昨日の傷を鮮明に思い出した。痛みがぶり返すかと思ったが、何のこともない。上着を脱ぎ、ワイシャツ一枚で出かけることにした。

もう一度ベッドを見る。遥は寝ているようだ。その瞬間、机の上が視野に入る。和久は机まで歩き、無造作に置かれたままの拳銃を一丁取る。上着はないので、仕方なくズボンに突っ込む。少々無理のある膨らみ方をしているが、誰も拳銃とは思わないだろう。

「どこか出かけるのですか？」

近づいてくる足音で目を覚ましたのだろう。背をベッドに預けたまま、遥は顔だけを和久に向けた。

「朝食だ。コンビニまで行ってくる。」

「そうですか。」

少しの逡巡の後、彼女は言葉をつなぐ。

「私も一緒に行きます。」

和久はため息を吐く。煙草を啜えて、左手で右肩を撫でる。

「五分で準備しろ。」

短く答えた言葉に、遥は大きく頷いた。

歩いて十分ほどの道のり。朝を迎えた街は人影もなく、燦然と輝くネオンもない。この街は朝と共に夜を迎え、日が落ちるのと共に朝を迎える。それは太陽と対を成す、月のように。ただ月が太陽によって輝くのは違い、ここは人が作り出す闇によって輝く。そして、人がいなくなることで輝きを失う。

「いらつしやいませ。」

和久は口の動きを読み取り店員がそう言ったのだと判断する。

遙は店に入ると一周辺りを見渡す。そして、店内の時計に目を留める。針は六時を少し回ったところを指していた。

「便利な店があるんですね。まだ六時ですよ。」

和久に近づき、小声で話しかける。

「サンドイッチかおにぎり、どっちだ？」

遙の言葉を見無視し、今必要な事だけを聞く。遙は自分の発言を見無視されたことに少し顔をしかめた。

「自分で選びます。ちょっと待っててください。」

和久が持つカゴを強引に奪い、店内を一周し始めた。

ふっ。一瞬の笑い声。それを発した和久自身が一番驚く。なぜ自分が笑ったのか。疑問が頭を掠める。

「楽しいからですよ。」

遙は、周りも気にせず、和久に聞こえるように大きな声でその疑問に答えていた。

楽しい…か。和久は心の中で呟いてから雑誌の前まで足を運ぶ。彼女の買い物がすぐに済むことを願いながら。

週刊誌を読むこと三十分間。気になる記事は全て目を通したときに、彼女は和久の隣に並ぶ。視線が雑誌に向けられると同時に和久は雑誌を閉じる。

和久の目に入るのは、カゴいっぱいの商品。

「何を買った？」

あきれながら尋ねる和久を横目に、遙はこれから必要なものと答えレジに向かう。和久は手にしていた雑誌を持って遙にならなかった。

「なぜコンビニで一万円も払わなければいけないんだ？」

和久は両手に持った袋を少し持ち上げて尋ねる。

「必要なものがそれだけあるからです。」

遙は、和久の皮肉に取り合わない。

「家に着いたらさっそく広げてみましょう。楽しみにしててくだ

さい。」

「俺は朝食を買いに來ただけだった。どんな朝食がテーブルに並ぶか楽しみにしている。」

「それは間違いです。あなたは自分で雑誌を買いました。朝食が目的だというのは嘘です。」

遙は和久を睨み、口を嚙む。和久もそれ以上は何も言わない。腕からぶら下がったビニール袋がパンツと擦れ、カシヤカシヤと音を立てていた。

重い鉄の扉を開ける。中にあるものはそのまま、和久たちを受け入れる。手に持っていた荷物を、ソファーに降ろし、空いた両手でタバコを取り出す。

このまま構えて待つか、どこかで身を隠すか和久は悩んでいた。

「静か過ぎる。」

和久のつぶやきに荷物を一つひとつ丁寧に取り出していた遙が反応する。

「オーディオはないんですか？」

「残念ながらそんな時間も、心の余裕もない。それは遙、お前もだ。下手をすれば殺される。どのように動くか。今の命題はさしあたってはそれだけだ。」

「とりあえず……」

遥は真剣な表情を浮かべながら、朝ごはんにしましょうと答えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0821c/>

月明かりの下

2010年11月23日04時59分発行